



令和7年度

第7回大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州 ビーバートン市、ユージーン市研修派遣



2025年10月9日～10月18日

令和7年度フレンドリーシティ交流事業

第7回大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州
ビーバートン市、ユージーン市研修派遣事業

団員名簿（学年、五十音順）

派遣期間：令和7年10月9日(木)～10月18日(土)

No.	役名	氏名	性別	学校名 役職名 もしくは 学年
1	団長	ひらの こうじ 平野 宏司	男	(公財)大垣国際交流協会理事
2	総務	すぎさき しょうご 杉崎 壮芽	男	岐阜県立大垣北高等学校教諭
3	総務	よしやす みえ 吉安 三恵	女	(公財)大垣国際交流協会職員
4	団員	かねこ せりす 金子 聖織朱	女	岐阜県立大垣北高等学校1年
5	団員	たかはし なぎさ 高橋 風咲	女	岐阜県立大垣北高等学校1年
6	団員	ふせ ゆづき 布施 柚季	女	岐阜県立大垣北高等学校1年
7	団員	よしだ わかな 吉田 和奏	女	岐阜県立大垣北高等学校1年
8	団員	いしだ るい 石田 瑞生	男	岐阜工業高等専門学校2年
9	団員	いとう ゆめな 伊藤 夢那	女	岐阜県立大垣商業高等学校2年
10	団員	いながわ ななせ 稻川 七瀬	女	岐阜県立大垣北高等学校2年
11	団員	おおくぼ いおり 大久保 衣織	女	岐阜県立大垣東高等学校2年
12	団員	おがわ れね 小川 恋寧	女	大垣日本大学高等学校2年
13	団員	よしだ じゅり 吉田 珠里	女	済美高等学校2年

第7回大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州 ビーバートン市、ユージーン市研修派遣 日程表

派遣期間：令和7年10月9日（木）～10月18日（土）[10日間]

派遣人数：13人（高校生10人、引率者3人）

月	日	現地時間	行程
1	10月9日 (木)	8:30 16:05 9:10 13:35 14:39 18:00-20:00 20:00	大垣駅集合 8:56大垣駅発⇒名古屋駅⇒品川駅⇒11:58羽田空港第3ターミナル駅着 羽田空港発（シアトル空港へ）【デルタ航空(DL166)】 ----日付変更線----（時差16時間） シアトル空港着 シアトル空港発(ポートランド空港へ)【デルタ航空(DL4065)】 ポートランド空港着 Beaverton高校生徒とWashington Square Mallで夕食と買い物 ホテル到着 【ホテル泊（ビーバートン）】
2	10月10日 (金)	9:00 10:00-14:00 14:00 18:00	«コロンビア川渓谷⇒ユージーン市へ» ホテル出発 コロンビア川渓谷（マルトノマの滝、クラウンポイント） ユージーンに向けて出発 ユージーン市内でホストファミリーと対面し、ホストファミリーの家へ 【ホームステイ①（ユージーン）】
3	10月11日 (土)	終日	«ユージーン市» 各ホストファミリーと一緒に過ごす  【ホームステイ②（ユージーン）】
4	10月12日 (日)	終日	«ユージーン市» 各ホストファミリーと一緒に過ごす  【ホームステイ③（ユージーン）】
5	10月13日 (月)	8:00-15:30	«ユージーン市、学校訪問①» 高校訪問【ホストブランズ、ホストスターと一緒に一日授業を受ける】 ◇サウスユージーン高校、チャーチル高校、シェルダン高校の3校に分かれる 【引率者】サウスユージーン高校、シェルダン高校を訪問 【ホームステイ④（ユージーン）】
6	10月14日 (火)	8:00-15:30	«ユージーン市、学校訪問②» 高校訪問【日本語クラス参加（日本・大垣のプレゼンテーション発表と生徒との交流）】 ◇サウスユージーン高校、チャーチル高校の2校に分かれる 【引率者】チャーチル高校訪問、ユージーン市役所表敬訪問 【ホームステイ⑤（ユージーン）】
7	10月15日 (水)	7:00 7:30 10:00-10:30 11:00-12:00 午後 18:00	«ユージーン市⇒ビーバートン市» ユージーン市内で集合し、ホストファミリーとお別れ ユージーン市を出発し、ビーバートン市へ ビーバートン市役所表敬訪問 ビーバートン市警察署訪問 ポートランド訪問 ホテル到着  【ホテル泊（ビーバートン）】
8	10月16日 (木)	8:30 9:30-10:30 11:00 12:30-16:00 18:00	«ビーバートン市» ホテル出発 サンセット高校訪問【日本語クラス参加（日本・大垣のプレゼンテーション発表と生徒との交流）】 オレゴンコーストへ向けて学校を出発 オレゴンコースト訪問 ホテル到着 【ホテル泊（ポートランド空港近く）】
9	10月17日 (金)	3:45 4:00 7:15 8:27 13:30	ホテルを出発し、ポートランド空港へ ポートランド空港到着 ポートランド空港発（シアトル空港へ）【デルタ航空(DL3675)】 シアトル空港着 シアトル空港発（羽田空港へ）【デルタ航空(DL167)】 【機内泊】
10	10月18日 (土)	15:45 20:35	羽田空港着 17:45羽田空港第3ターミナル駅発⇒品川駅⇒名古屋駅⇒20:33大垣駅着 JR大垣駅解散

訪問先の紹介

米国オレゴン州ビーバートン市、ユージーン市



大垣市のフレンドリーシティは、米国オレゴン州に2都市あります。両都市を訪問しました。



【ビーバートン市】

オレゴン州最大都市のポートランド至近にあるため、商業地区へのアクセスがよく、スポーツメーカーのナイキ本社やIT関連企業が立地し産業が盛んな一方、自然豊かな渓谷に恵まれ、家族と暮らしやすいまちとして知られています。また、市内には日本語教育プログラムをもつ高校が複数あり、日本文化への関心が高いまちでもあります。(大垣市ホームページより)



【ユージーン市】

州内で2番目の人気規模を誇る都市です。市内には、日本からの留学生が多いオレゴン大学などが立地し、教育環境に恵まれた学園都市です。また、日本語教育プログラムをもつ小学校や高校が複数あり、日本文化への関心が高いまちでもあります。(大垣市ホームページより)



【両都市との交流のきっかけ】

両都市との交流は、平成2年(1990年)にオレゴン異文化交流協会の高校生訪問団が大垣市を訪問したことがきっかけです。これ以降、市内で活動する国際交流団体WINGが中心となり、毎年継続して受け入れをしてきました。

この訪問団は、主にビーバートン市とユージーン市の高校生で構成され、これまでに数多くの両市の高校生が、大垣市でホームステイなどによる交流をしています。

こうした長年にわたる両市との交流から、平成27年(2015年)11月に小川市長(当時)が両市を表敬訪問し、フレンドリーシティ交流が正式にスタートしました。

平成28年度(2016年度)に第1回の派遣事業を実施し、その後毎年実施しており、今回は7回目となりました(新型コロナウイルスの影響で令和2年~令和4年は中止)。

	大垣市	ビーバートン市	ユージーン市
人口	約16万人	約10万人	約18万人
面積	206km ²	50km ²	107km ²

Be an American!

団長（公益財団法人大垣国際交流協会 理事）平野 宏司

「ああやっぱり、これがアメリカだよな」。

30年前、初めて米国西海岸を訪れた当時高校生の私は、豊かな自然と心温かい人々に触れ、それを「アメリカ本土の原風景」として心に刻んだ。しかし米国に関する最近の報道は必ずしもポジティブなものばかりではない。閉鎖的で高圧的、商業至上的なスタンスが目立つ。それもアメリカのひとつの姿ではあるが、私が今の高校生に見せたいアメリカではなかった。

ところが今回久しぶりに渡米し、当時のアメリカは変わることなく健在であることを実感。研修のアクセラも一気に踏み込んだ。これぞアメリカ。今回、高校生10名と共に訪れたオレゴン州ビーバートン市とユージーン市の理解と協力のもと、安全かつ意義深く実施することができた派遣事業。現地の皆様が、私たちを温かく迎え、学校・公共施設・企業訪問など、多様な学びの機会を与えて下さったことに深く感謝申し上げたい。

一方で、今回の研修が成功した最大の理由は、参加した高校生10名の素晴らしい姿にある。彼らは誰もが、吸収力が高く、柔軟で、互いを思いやりながら行動し、常に団体としての雰囲気を良好に保った。現地の方々とも積極的に英語でコミュニケーションを取り、笑顔と礼節をもって人間関係を築く姿が随所に見られた。これは、これから国際社会において最も重要な資質であり、彼らが今後どの分野に進んでも、大きな力となると確信している。

掲げたスローガンは” Be an American!”（アメリカ人たれ!）*。異文化の内側に飛び込み、行動様式や価値観を一度そのまま体験することでこそ、多様性を受け入れる心が育つ。彼らが戸惑いながらも挑戦し、一つひとつ吸収していく姿は、まさに国際人としての第一歩であった。

また私は自らのミッションを、安全かつ楽しく有意義な派遣事業の成功と、今後の交流軸の複線化と考えていたが、両市長をはじめ、何名かのビジネス関係者とお会いすることができた。合間に現地の名所を訪問するなど、現地を深く理解する貴重な時間も設けていただいた。

また渡米前後を含み献身的に支援した杉崎先生、吉安さんの尽力にも深く感謝したい。安全管理だけでなく、学生一人ひとりの挑戦を支え、学びを深めるために細やかに寄り添って頂いた。

そしてなによりも、こうした貴重な国際交流の機会を継続して提供してくださる大垣国際交流協会並びに関係者の皆様に心より感謝と敬意を表したい。今回の経験は、参加した高校生だけでなく、私自身にとっても大きなチャレンジであったが、そんなリアルな大人の姿も見せられたならば望外の喜びである。今後もこの絆が、さらに実り多い交流へと発展していくことを願う。

*Be American（アメリカ人のようであれ）の表現もあるが、単に米国的であるだけでなく、歴史や社会的背景も含めてアメリカを体感して欲しいとの願いから Be an American（アメリカ人たれ）とした。

未来をつなぐ大垣とオレゴンの高校生

総務（岐阜県立大垣北高等学校 教諭）杉崎 壮芽

私は第7回大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州派遣事業に引率者として参加しました。そのなかで、オレゴン州で出会った方々の温かさを感じながら、団員とともに多くの体験をすることができました。その中で得た学びを2つ紹介します。

1つ目は、団員の生徒の成長です。私は団員に「英語力を向上させる最善の方法は、毎日コツコツ取り組むこと。10日間という短い期間の研修の中で、英語が劇的に伸びることはあまり期待できない。それでも、現地で挑戦し、その挑戦で得られる成功は自分の中に残り続け、失敗は次につながる材料となる」という話をしました。実際、生徒はホームステイと高校訪問を通して、多くの挑戦をしたようです。

そして、ホームステイを終えてホストファミリーと別れた日は、ポートランドでの研修でした。ある生徒から、ポートランドのフードコートで注文する際「心配だから近くにいてほしい」と言われました。必要に応じて補助をしようと思っていましたが、その生徒はまるで何年もアメリカに住んでいるかのように、自然な英語で店員さんとやりとりしていました。その生徒の後ろに並んでいた別の生徒も同様に難なく注文を済ませていました。私の心配は完全な杞憂に終わり、10日間という短い研修期間でも、大きく成長した生徒の姿に驚かされました。

2つ目は、オレゴン州の日本語教育事情についてです。オレゴン州の高校生は、学校の設定する外国語を選択して学習します。日本語以外に、フランス語、スペイン語、中国語などがあり、高校によって選択できる外国語が異なります。South Eugene高校を訪問した際、日本語を教える教員から、その学校では、フランス語を選択する生徒が最も多く、次いでスペイン語、日本語が人気とのことでした。

実は、現地の日本語教員も、自分の仕事を続けるために、日本語の授業を受ける生徒をたくさん確保することが必要だとのことです。なぜなら、選択者数によって予算が決められるからです。予算がつかなければ、働く場所がなくなってしまいます。だからこそ、日本人の生徒が学校に訪問し、日本について話してくれる機会が貴重だと話していました。

また、外国語の選択科目の中で日本語が選ばれる要因として、日本のアニメの力が大きいとのことです。実際、複数の学校の教室に『鬼滅の刃』『NARUTO』『名探偵コナン』といった日本の漫画の日本語版が置かれ、教室や廊下に生徒の描いた日本のアニメのキャラクターの絵が飾られていました。アニメを含めた日本の文化をもっと知りたいという現地の生徒の意欲が、アメリカで働く日本人の仕事を作っていると考えると興味深いです。

10名の団員が10日間で得た経験は、きっと今後の成長の糧となり、加えて、滞在中に関わったオレゴン州の生徒も、大垣を含め日本との関わりを深めてくれると信じています。

最後に、今回の研修をコーディネートしてくださったオレゴン異文化協会会长の小沢先生、アメリカの高校の先生方、団長の平野先生、大垣国際交流協会事務局の吉安様、そして研修を支援してくださった全ての皆様に感謝申し上げます。そして何より、今回の派遣に参加した10名の団員の生徒の今後の活躍に期待しています。

感謝の気持ち、つながる心 ー「TRY」ー

総務(公益財団法人大垣国際交流協会 職員) 吉安 三恵

平成27年(2015年)にオレゴン州の2都市と大垣市がフレンドリーシティとなり、10年が経ちました。派遣事業はその翌年の平成28年(2016年)に開始し、今回で7回目となりました。この交流事業に参加してきた先輩団員たちが素晴らしい交流を継続してきたおかげで、今回も現地で温かく迎えていただけたと感じました。私自身もこの派遣事業を担当するのが7回目となりました。1回目は手探りで始めたものでしたが、オレゴンの方々との友好関係も深まり、より一層日本・大垣との交流を大切に思っていただけていると感じました。交流事業は多くの方の協力があって成り立つものであり、感謝の気持ちでいっぱいです。今回の滞在で特に印象に残っていることは2つあります。

1つ目は、帰国の際に団員が「英語を話すのが楽しくなった」と言っていたことです。英語に興味のある団員が多くいたかもしれません、英語でのコミュニケーションの経験は少ないようでした。間違っていたらどうしよう、伝わらなかったらどうしよう、という思いは少なからずあったはずです。しかし、それを超えて自分の言葉で伝えることを繰り返す中で、「伝えたい」という思いが芽生えたように感じます。この経験が自信となり、言葉はあくまでコミュニケーション手段の一つであり、言葉の先にあるものに気付いたのだと感じました。

2つ目は、アメリカで日本のファンにたくさん会ったことです。私たちが日本から来ていることを知ったレストランの店員、同じホテルの宿泊客などから、「近々日本に行くよ」「日本のアニメが好きだよ」「前行ったことがあるけどまた行きたい」など声をかけてもらうことがとても多かったです。それをきっかけに話は盛り上がり、とても楽しい時間を共有することができました。今はインターネットなどで情報が手に入れやすくなっています。世界は近くなってきていると感じる一方で、実際に自分の目で見たり、現地の人と話をしたり、肌で感じたりすることは交流の原点であり、相互理解の原点でもあると再認識する機会になりました。

団の目標は「感謝の気持ち、つながる心ー『TRY』ー」。団の目標を決める時に、たくさんの意見が出ました。その中で①オレゴンを訪問できること、ホームステイできること、学校訪問ができることは当たり前ではなく、たくさんの方の協力があって成り立っていることに感謝し、自分たちがどのような行動や態度をとるべきか考えること、②出会う人々と心と心がつながるような時間を過ごしたいということ、そして③臆することなく挑戦し続けること、の3つの思いを込めた団の目標です。オレゴンでの研修を終えた今、高校生たちの様子を思い出すと、この目標の元にたくさんのこと挑戦し、多くの学びを得たと思います。今回の経験を一つの財産として、これから羽ばたいてほしいと思います。

ホストファミリーとのお別れの際に、ホストファミリーからは「私たちの方こそ、こんな機会をありがとうございます」「もっと一緒にいたかった」「家族で日本に会いにいきます」などの声をいただきました。大垣の高校生だけでなく、アメリカの高校生やその家族にとっても、貴重な経験となったようで嬉しい限りです。この友情の絆がこれからますます深まり、長く続くことを願っています。

オレゴン側で準備してくださった小沢先生、ホストファミリーの皆さん、学校の皆さん、温かく迎えてくださった全ての皆さんに心より感謝いたします。高校生の皆さんが、この経験を糧にこれからどんな道に進むのか、またこの経験をどう社会に還元するのか、楽しみです。



オレゴンの思い出



違う日常

岐阜県立大垣北高等学校1年 金子 聖織朱

【ポートランドで見つけた工夫】



研修で印象に残っていることの一つは、初めて路面電車を利用したことです。日本ではあまり乗る機会がなかったので、道路の真ん中を電車が走る光景がとても新鮮でした。停留所も分かりやすく、料金の支払い方法もシンプルで、現地の人々の生活に溶け込んでいる交通手段などを感じました。車と同じ道を走っているのに、ぶつかることもなくスムーズに運行していて、交通マナーの違いにも驚きました。路面電車を降りたあと、友達と散歩していたときに、現地の方から宗教の勧誘を受けたこともあります。突然話しかけられて最初は驚きましたが、相手の言葉を理解しようと耳を傾けるうちに、文化や考え方の違いを直接感じられる貴重な経験だったと思います。日本ではあまり見られない場面なので、海外ならではの出来事でした。

街を歩いていると、信号機に秒数が表示されているのが印象的でした。あと何秒で青になるか、あるいは赤になるかが分かるので、とても便利だと感じました。観光客にとっても分かりやすく、安全に渡れるように工夫されているのが良かったです。

今回の体験を通して、文化の違いを肌で感じ、さまざまな価値観に触れられたことが自分にとって大きな学びになりました。これから海外に行く機会があれば、また現地の交通や生活の様子を観察して、自分なりに違いを見つけていきたいと思います。

【キノコ王国オレゴン】

研修を通して、現地では「きのこ」がとても身近な存在であることに気づきました。マーケットに行くと、日本では見たことのない種類のきのこがたくさん並んでいて、形や色もさまざまでした。特に驚いたのは、食用だけでなく、薬やお菓子にもきのこが使われていたことです。きのこのサプリメントや、きのこ入りのチョコレートまで売られていて、現地の人々の生活の一部になっていることが分かりました。店員さんに聞いてみると、健康に良いという理由でよく食べられているそうです。きのこには栄養があり、免疫力を高める効果があると考えられていると教えてもらいました。日本でもきのこはヘルシーな食材として人気ですが、海外ではもっと幅広い形で利用されている印象でした。また、マーケットを歩いているときに、きのこを使ったスープの香りが漂ってきて、思わず立ち止まってしまいました。味



見をさせてもらうと、日本の味噌汁とは違う独特の風味があり、きのこの種類によって味も変わることを知りました。今回の経験を通して、同じ「きのこ」でも国によって扱い方や考え方方が違うことを学びました。食文化にはその国の歴史や価値観が表れていると感じ、普段何気なく食べている食材の奥深さを改めて知るきっかけになりました。

【ホストファミリーの温かさ】

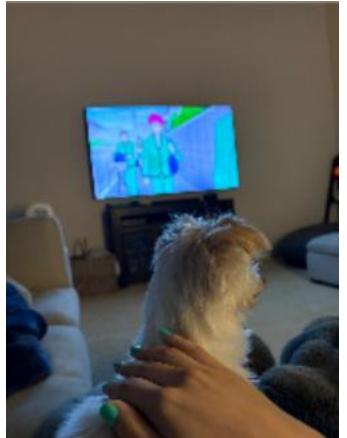


たいい思い出です。

今回の研修で一番心に残ったのは、ホストファミリーの温かさでした。最初は言葉の壁が不安で、うまく会話できるか心配でしたが、ホストファミリーは笑顔で迎えてくれて、ゆっくり話してくれたり、ジェスチャーで伝えてくれたりしました。毎日の食事の時間には、学校での出来事や日本の生活についてたくさん話し合い、お互いの文化を紹介し合うのが楽しかったです。慣れない環境でも安心して過ごせたのは、彼らの優しさのおかげでした。特に思い出に残っているのは、カボチャ農園に行ったことです。ジャック・オ・ランタンを作るためのカボチャを取りに行きました。日本では本物のカボチャを使ってジャック・オ・ランタンを作るることは滅多にないのですごく新鮮でした。大雨だったけれど、それもまたいい思い出です。

【当たり前の違い】

研修では、現地の人々との交流を通して多くのことを学びました。高校の授業やフィールドワークでは、日本との違いを実際に見たり聞いたりすることができ、教科書では得られないリアルな学びがありました。一番驚いたのは今オレゴンでは授業中のスマホの使用の禁止が徹底され始めていることです。授業に関しては自由なイメージがあったので来年からスマホ禁止の条例が出されるという話を聞いた時は驚きました。街を歩くときは、建物の造りや人々の雰囲気、交通のルールなど、あらゆるもののが新鮮で、毎日が発見の連続でした。特に印象に残っているのは、文化や考え方の違いを理解しようとする気持ちの大切さです。日本では当たり前のことが海外では通じないこともあり、そのたびに「相手を尊重すること」の意味を考えさせられました。



英語を通して会話する中で、自分の言葉が通じたときの嬉しさも大きく、もっと勉強したいという意欲が強まりました。この研修を通して、英語の力だけでなく、人としての視野も広がったと感じます。ホストファミリーとの別れの日はとても寂しかったですが、「またいつでも帰ってきてね」と言われた言葉が今も心に残っています。帰国後も連絡を取り合い、写真を送り合うたびに、あのときの温かい時間を思い出します。今回の研修で得た経験を生かして、これからも世界に目を向け、さまざまな人と関わりながら成長していきたいと思います。



言語を超えて、心でつながる

岐阜県立大垣北高等学校1年 高橋 凪咲

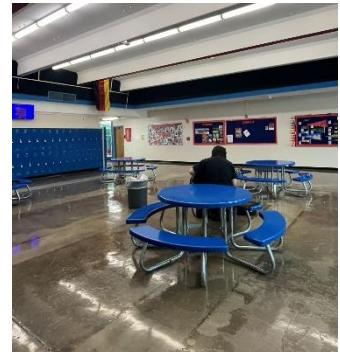
【10月13日 学校訪問1日目 チャーチル高校】

学校訪問1日目、私はホストファミリーのリリーが通うチャーチル高校に行った。チャーチル高校の授業は1コマ90分で、生徒は1日に3~4コマの授業を受けていた。特に印象に残ったことは2つある。

1つ目は、授業の様子についてだ。日本の高校のように、クラス単位で受ける授業ではなく、授業によって異なる学年の生徒たちが、毎回決められた教室に集まって受けていた。学年は異なっていても、授業中の交流などは活発に行われているところが素敵だった。一方、授業中に、先生に報告することなく一時退出したり、お菓子を食べ始めたりする姿には衝撃を受けた。ヘッドフォンをしたまま授業を受けることは、日本の高校では、当然見ることはできないだろう。また、授業は日本のように教科書とノートのスタイルではなく、パソコン一台で完結するスタイルだった。提出物も連絡もすべてパソコンで行うため、どの生徒もとてもタイピングが速く、使いこなしていた。



2つ目は、校舎の構造についてだ。チャーチル高校はとても大きく、大学のように見えた。各教室も広々としており、私の通う高校と違い、木の机と椅子がそれぞれ置かれているのではなく、グループごとに机が円になって配置されていた。10分の休み時間の間に、次の授業の教室まで移動するだけでほぼ休み時間が終わりそうになる時もあった。生徒は全員早歩きで忙しく移動していて、私もリリーに置いて行かれないように必死についていったのを覚えている。また、チャーチル高校のドアは本当に大きくて重い開き扉であった。おそらく、風の強さによって、勝手に開かないようにするためであると思うが、校舎が大きいため、移動のたびに何回も開け閉めを行うのは非常に大変だった。



【アメリカの高校と日本の高校の違い】

私が日本の高校との違いを調べてみて、特に印象に残ったことは2つある。1つ目は、学校の仕組みについてだ。日本の高校は3年制だが、一般的にアメリカの高校は4年制である。日本のように、高校受験をするのではなく、それぞれ家から近い高校に通うのが当たり前だそう。1学年に約270人が在籍していており、これは私の通う高校と似ていると思った。受験がないため、いろいろな個性豊かな人々が集まっているようにも感じた。

2つ目は、学校行事についてである。日本の高校のメインとなる学校行事と言えば、修学旅行や球技大会が挙げられるが、アメリカのメインとなる学校行事は、ダンスである。5月にはプロム、10月にはホームカミング、3月にはフォーマルと呼ばれるダンスパーティーが行われている。私のホスト

シスターのリリーも毎回本当に楽しみにしていると教えてくれた。パーティーでは、それぞれが自前でドレスなどの衣装を準備して楽しい時間を過ごすそうだ。「日本でダンスの授業はあるの?」と聞かれたとき、私は、ダンスの行事はないけれど、小学生の時は運動会の種目でダンスがあったことや、文化祭で有志の人たちが踊っていることを話した。するとリリーが「ダンスパーティーがないなんて!」と言いたげな驚いた顔をしていたのをよく覚えている。見せてもらった写真の全部が本当に楽しそうで日本の高校でもぜひ行ってほしいと思った。

以上のように、日本とアメリカの高校にはさまざまな違いがあることが分かった。私はアメリカの高校をうらやましいと思うこともあったけれど、私がリリーに自分の高校のことを話すと、「Nice!」と言われることもあった。どちらもとても素晴らしいと改めて思った。

【最高の思い出のホームステイ】

私のホームステイ先のリリーの家は4人家族だった。私は日本でホームステイを受け入れていなかったため、馴染めるか不安だったが、リリーたちは快く受け入れてくれた。



土曜日、私はリリーとホストファザーにシルヴィーズ川に連れて行ってもらい、ハイキングを楽しんだ。約8キロメートル歩き、帰りの車では全員疲れ果てていたが、本当に絶景でとても心に残る体験となった。その後はサタデーマーケットに、リリーとリリーの妹とホストマザーと向かい、買い物を楽しんだ。サタデーマーケットは、いろいろな人が出店していて、服やアクセサリーだけではなく、美味しい季節の野菜や果物も売っていて、賑やかな雰囲気に包まれていた。私はそこでホストマザーに、チョコクロワッサンデニッシュを買ってもらい、みんなでおやつの時間を楽しんだ。

日曜日の朝、ハロウィンに向けて、パンプキンパッチにカボチャを買いに行った。日本では見たことのない、白くて丸いカボチャを3つ買った。私はてっきり、カボチャ料理に使うと思い、ホストマザーに「このカボチャは甘いの?」と聞いたところ、あそこに売っているカボチャはほとんど、食用ではなくジャック・オ・ランタン用であると教えてくれた。午後からは、オレゴン州のプロバレーボールチームの試合を見に行った。会場の雰囲気はとても明るか



った。負けてしまったけれど、楽しい時間を過ごせた。夜は、ホストマザーと一緒にハンバーガーを作った。初めは英語が分からなくて悔しい思いをしたこともあったが、不完全な英語なりにも頑張って伝えようとすることが大切であると気付いた。ハンバーガーを作る時にも、「なぜこの手順を挟むの?」などと積極的に質問して、コミュニケーションをとった。出来上がったハンバーガーを食べたホストファザーから「Good!」と褒められた時は本当に嬉しかった。夕食後に、家族全員で、マリオカートをしたり、日本のアニメを鑑賞したりした時間も私にとってかけがえのない思い出の一つとなった。

私は、いつかまた、リリーたちに会う時までに、英語の動画やドラマを英語字幕で見るなどして、英語力をつけたいと思った。そして、日頃から日本語でも、自分の思いを恐れずに伝えられるように練習し、また会った時には、もっと自分の思いをありのままに伝えたい。



シェルダン高校訪問とオレゴンの環境へのまなざし

岐阜県立大垣北高等学校1年 布施 柚季

【10月13日 シェルダン高校訪問】

オレゴン州のシェルダン高校を訪問したこの日、私たちは現地の高校生活を体験し、授業や部活動、校内の雰囲気を直接感じることができました。シェルダン高校は緑豊かな環境の中にあり、校舎の中も明るく開放的で、廊下の壁には生徒たちの作品やポスターが多く貼られていました。印象的だったのは、生徒一人ひとりがのびのびと自分の意見を発言していました。授業ではディスカッションの場面が多く、先生と生徒が対等に意見を交わしていました。



校内を見学する中で、リサイクルや環境への意識が非常に高いことにも気づきました。分別されたごみ箱があちこちに設置され、環境保全の取り組みが日常の一部として根づいていたのです。単に「環境を守る」という考えではなく、「環境とともに生きる」姿勢が、学校全体の雰囲気から伝わってきました。



【探究テーマ「ごみ問題」を通して】

私の探究テーマは「ごみ問題」です。シェルダン高校やその周辺の街を歩いて感じたのは、アメリカの人々の環境意識の高さでした。ごみ箱のデザインや配置には多くの工夫があり、分別しやすいように色分けやマークが明確にされていました。私は街中や学校内でたくさんのごみ箱の写真を撮りましたが、どれも清潔に保たれており、使いやすい位置に設置っていました。



日本と比べるとごみ箱の数が多く、地域全体で「ごみを出さない」「リサイクルする」という意識が根づいているように感じました。この体験を通して、私たちの身の回りでも、もっとごみの分別や減量を意識できる取り組みを広げたいと思いました。

加えて、シェルダン高校の先生から「なぜオレゴン州に来たのか」と聞かれた時に、自分の探究テーマについて説明しました。そして、「なぜ人はごみを出すのか」「なぜ環境を守ることが必要なのか」といった哲学的な視点で物事を考える時間を授業の中で作ってくださいました。その中でも生徒の一人が、「ポイ捨てをなくしたりしたり、ごみを分別することで環境をきれいにすることが、私たちのこころを美しくすることに直結する。」と言っていたのが、とても印象的でした。このような機会はとても新鮮で、印象に残りました。単なるごみの分別ではなく、人と自然との関係性、そして「自分がどう生きたいか」という根本的な問いにもつながりました。現地の高校生が授業で意見を交わす姿を見て、「考えること」「語り合うこと」そのものが環境を守る第一歩だと感じました。



また、出発前に、オレゴン州の環境政策について調べた際、州全体がリサイクルや再利用に非常に力を入れていることを知りました。実際に現地でビーバートン市長さんにお話を伺う機会があり、「環境問題は政治や行政だけでなく、市民一人ひとりの意識によって支えられている」と語ってくださったのが印象的でした。

さらに、ホストファミリーの家庭でも、ごみの分別や堆肥づくりが日常的に行われていました。食事のあとに残った生ごみをコンポストに入れる様子を見て、環境への配慮が生活の一部になっていることを実感しました。日本では「環境を守る」ことが特別な行動になりがちですが、アメリカでは「当たり前のこと」として自然に取り入れられていました。こうした違いを知ることで、環境への考え方の深さや広がりを肌で感じました。

【ホームステイと研修を通して感じたこと】

ホームステイでは、現地の家族と過ごす中で文化の違いを多く学びました。食事のスタイルや時間の使い方、家族同士のコミュニケーションの取り方など、日本とは異なる部分がたくさんありました。どれも新鮮で楽しい経験でした。特に印象に残っているのは、ホストファミリーがとても温かく迎えてくれたことです。英語での会話に不安がありました。ゆっくり話してくれたり、身振り手振りで伝えてくれたりして、少しずつ自分から話しかける勇気が持てるようになりました。

土曜日には、ホストシスターとラウンドワンに行きました。そこで会話を重ね、はじめの緊張感も忘れ、楽しい時間を過ごすことができました。そこで「アメリカではラウンドワンが流行っているよ。」「アメリカのラウンドワンではスポーツではなく、ゲームがメインなんだよ。」という話を聞いて、流行りも全然違うところも驚いたことの一つでした。こうしたやり取りを通して、言葉だけでなく、相手を理解しようとする気持ちの大切さを学びました。また、異文化に触れることで自分の価値観も広がり、将来は国際的な視点を持って、環境問題や福祉などに関わっていきたいという新たな目標もできました。



この研修全体を通して、私は「環境を守る」という意識が単なる知識ではなく、「人との関わり方」「社会とのつながり」にも深く関係していることを実感しました。シェルダン高校やホストファミリーでの経験を通じて、自分の身の回りからできる小さなことを続けることの大切さを学びました。これからも、環境や人とのつながりを大切にしながら、持続可能な社会づくりに貢献できるよう努力していきたいです。



さらに、言語学習を通して異なる文化や価値観を理解し、自分とは違う考えを持つ人と対話する力を高めていきたいです。英語を学ぶことを「勉強」としてだけでなく、世界の人々と協力し合うための手段として捉え、異文化の中で自分の考えを伝えたり、相手の立場を理解したりできるようになりたいと思います。そのような交流を重ねることで、国や文化の違いを越えて支え合える関係を築き、より多様性を認め合う社会づくりに関わっていきたいです。

We are all one race

岐阜県立大垣北高等学校1年 吉田 和奏

【10月15日 ビーバートン市役所と警察署】

10月15日、派遣団はビーバートン市役所、警察署を訪問した。2時間ほどのバス移動の末、最初に訪問したのはビーバートン市役所だった。市庁舎は奥に長く、白と黒のツートーン。建物の周りは開放的で、横ではカラフルな路面電車が走っていた。日本では見ない特徴的な自転車置き場を横目に建物の中へ入ったが、ロビーは大きな窓により自然光がよく入る作りになっており、オフィスはとても明るい印象を受けた。ビーティー市長を訪ねると、あたたかい歓迎とともに部屋から一望できるビーバートンの景色を見せてくださった。その日はオレゴンでは多くない快晴。自然にあふれた、とても綺麗なビーバートンの景色を見ることができた。ビーティー市長は、履いていたNike製の靴を意気揚々と私たちに見せるようなとてもフレンドリーな方だった。Nikeのピンバッジやビーバーのステッカーなどを一人ひとりに手渡され、市庁舎内を案内してもらった。職員にとって働きやすい環境になることを意識した様々な部屋の紹介をしていただき、特に議会の行われる部屋では、その席に実際に座るという貴重な体験をした。もちろんビーバートン市役所にもさまざまな申請をする窓口が設置されていて、私は市として管理するべき情報があることを再認識した。



次に訪問したのは警察署。中に入ると、すぐに警察のシンボルである大きな白バイが出迎えてくれた。警察官のLambは様々な案内をしてくれて、今までどこかドラマや漫画の世界のようだと思っていたことがその場所では日常であったことに強い感動を覚えた。特に印象に残った話は、スタンガンや催涙スプレーを所持するときには、最初にその痛みを自分で体感しなければならないという話。理由を聞くと、それを使用する対象がどのような痛みを感じているかを知るためという返答が返ってきた。催涙スプレーの痛みに3日間耐えたことも、土壇場であろうと相手を尊重する姿勢、ただ取り押さえたいわけではない気持ちが表れていて、彼らが拳銃を身につける覚悟を感じた。

【オレゴンにおける「教育」】



アメリカの大学も、日本の大学と同じ4年間の課程。医者になろうとすれば、大学卒業後に医療専門の大学へまた4年通う必要があるため、それだけで8年の歳月が必要だとのこと。しかしやはり大学の費用はかなり高く、アメリカでも公立大学の方が、費用が安くなることは日本と変わらないそうだ。

教育について私が感じた一番大きな違いは、「自由度」である。もちろんピアスをしていいだとか、髪色が自由だとかいう校則に限った話ではない。教育に関して自分にとって衝撃的だったのは、学校に登校して学

習するのではなく、家で学習するという選択肢があることだ。ホストシスターのSofiaは昔、学校には行かず家でホストマザーであるBarbaraから勉強を教わっていたという。これはホームスクールという制度で、テストを受けることで進級が可能だそうだ。Sofiaは学校の環境が合わなかつたことからそれを選んだのだと聞いた。この制度は、例えば学校で教わる範囲のレベルを超えた学習をしたり、自身の興味に合わせた知識をより増やしたりすることができる制度でもある。また他の面からいふと、宗教的な家庭が、学校で学ぶこととは異なる宗教的なことを子どもへ教え込んでおくこともある。このような生徒を一つのパターンに限って学習させない「自由度」の高い制度により、一人ひとりの「好き」や「得意」に合わせた学習が出来るのであろう。

【非日常な日常】

オレゴンに来てわずか2日目に始まるホームステイについて、私はホストファミリーと対面するまで不安と期待の二つの感情が入り混じっていた。しかしホストファミリーと対面し、とても優しい笑顔で「楽しみにしていたよ」と言ってもらえたこと、家で待っていたホストファザーのHideが「おかえり」とあたたかく出迎えてくれたことで、本当に優しくあたたかい家庭にホストしてもらえたのだと確信した。1日目の夜にはお土産に渡したマグロ解体パズルを早速作り、ピアノの上に並べて飾ってくれた。毎日夕食後は家族みんなで他愛もない話をして、料理上手のSofiaが作ったアイスを食べたり、パンプキンブレッドを食べたりして、自分にとって非日常な空間でいつも通りの日常が繰り広げられているその状況が、新鮮でたまらなかった。みんな毎日「明日の朝食は何が食べたい?」「今日はどこに行きたい?」と聞いてくれて、本当にたくさんの経験をさせてもらった。Barbaraは知識や経験が豊富で、猫のカルシファーが小鳥を咥えて帰ってきた日には、家の周りやオレゴンに住んでいる動物や、カルシファーが今まで咥えて帰ってきたものをたくさん教えてくれて、ある日街中にある小さな図書館についても教えてくれた。Sofiaは料理上手で、BarbaraやHideが教えていないのにとても美味しい料理を作るそうだ。実際私は、Sofiaの作るカリカリベーコンが大好きで、恋しくてたまらない。Hideはホームステイの最後の夜、私を助手席に乗せててくれて、犬のグレイシーと一緒にドライブを兼ねた買い物へ連れて行ってくれた。3人とも日本のことなどても興味を持ってくれて、日本語で言ってくれる「おはよう」「おやすみ」「おいしい」「頑張れ」の言葉に心からの温かさを感じたし、心からこの家にホストしてもらえて幸せだと思った。

国が違えば価値観や考え方はずるから「国柄」が人々に現れるのだろう。しかし、その国柄の境界は決して超えられないものなどでは無く、お互いを知り、尊重し合い、ともに笑えば、同じ喜びを共有できるのだと今回の研修を通して感じた。もし英語がうまく話せなくとも懸命に聞いてくれたり

汲み取ってくれたりするだろうし、分からぬことを聞けば手厚く教えてくれるだろう。そしてその土地の人々のあたたかさを享受し、私たちも大きな心で接すれば、国籍は戸籍上に過ぎないものになると思う。私たちは同じ人間なのだということを強く感じた研修だった。これから社会に出る自分にとって、社会として国際的な交流は欠かせない。そんなとき、まずは相手の国の挨拶でいいさつをしてみて、お互いを知り、深めていきたい。



↑自由に持ち出し、返却可能な屋外図書館。地域の人の古本を入れることもある。

思い出となる発見

岐阜工業専門高等学校2年 石田 琉生

【事前研修や出発式、10月9日高校生との食事】

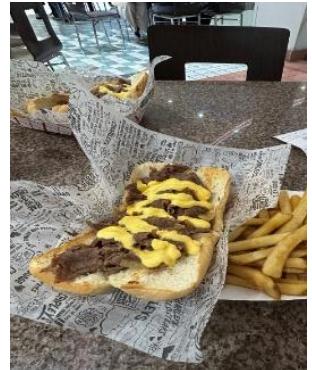
初めてオレゴン州に行く団員たちと会ったときは不安でいっぱいでした。仲良くなれるのか、大丈夫なのかと心配事ばかり考えていました。しかし団員とオレゴン州について調べ、プレゼンを練習していく中で会話をする機会が増え、出発までには壁もなく、自分の意見をしっかりと言える関係になっていました。出発式では市長さんや議長さんなどたくさんの方々がお見えになりました。緊張する気持ちもありましたが、私は団員として自信をもって式に参加しました。式ではオレゴン州に行って何をしたいのか、何を学びたいのか、探求テーマについて話をしました。それぞれが探求テーマを発表しテーマについてそれぞれいろいろなお話をしました。私のテーマは服で、服について、今の日本とオレゴン州での流行りの違いや、合わせ方の違い、色の使い方の違いなど、様々な視点からの話をたくさんしました。



約10時間のフライトを終え、ビーバートン高校の生徒と会いました。シ



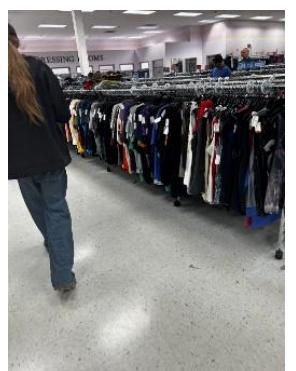
ヨッピングモールのフードコートでそれぞれご飯を食べ、買い物をしました。私はパンにお肉を挟んだ料理と一緒に食べました。高校生の人とは趣味の話をすることができ、オレゴン州についていいところや好きな食べ物、日本食について、普段の生活の違いなどとても多くの話ができました。私は2人で食事も買い物もしました。話が途切れないか少し心配でしたが、写真を見せ合って話したり、ジェスチャーを使って話したり、言葉や単語が通じなくても、会話が途切れることなく楽しい時間を過ごすことができました。買い物でもいろいろな説明をしてくれて、充実した時間を過ごすことができました。



【一番見て学びたかった事】



私のテーマは服です。服について日本とアメリカでどのような違いがあるのかを見て調べました。今のアメリカではパーカーが流行っているとホストブラザーから聞いて、人々を見るととても多くの人がパーカーを着ていました。少し大きめのオーバーサイズのパーカーを着ている人がたくさんいました。気候的に日本より寒いのですが、半袖半ズボンを着ている人も少なくなかったです。アメリカ発のブランドのCarharttやGAP、Dickiesがとても多く見られました。特にCarharttはズボンもジャケットも、ましてやカバンもいろいろな場所で見ることが出来ました。Carharttが売っているお店にも行きました。



そこでは日本に比べて、売っている服やカバン、帽子の量がとても多く、さらに値段も日本より安かったです。ズボンではLevi'sのようなデニムパンツを履いている人が多かったと感じました。今の日本の若い人々はオーバーサイズのデニムを履く人が多いイメージですが、オレゴン州では日本ほどオーバーサイズではなく、足より少し太いデニムを履いている人が多かったです。日本との違いがたくさんあり、色々な視点から人々を観察し、いい発見ができたと思います。

【ホームステイと全体を振り返って】



ホームステイでは他の団員がいないので少し心配や不安もありましたが、いい時間を過ごせたと思います。家の周りには木がありとても自然豊かな場所でした。動物もたくさんいて家の中には犬と猫が2匹ずつ、外には羊や鹿、鶏などの動物がいました。ホストブラザーと一緒に羊の餌やりや、移動などいろいろな経験をさせてもらいたても楽しかったです。



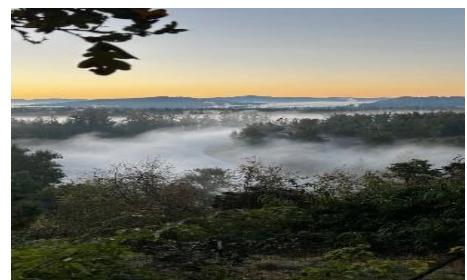
朝には家の外から川が見え、川に霧がかかっているのを見ることができ、とても感動しました。夜にはハイキングに行き、いい景色を見る事ができました。休みの日には買い物へ行ったり、ホストブラザーの友達に会うことが出来たり、探求テーマの服について、服屋や古着屋に行くこともでき、とてもいい経験が出来ました。

家の近くでとれるリンゴを使って、リンゴジュースと一緒に作ることや、家の周りにある木の枝を使って焚き火を作り、その周りでお話をすることができます。オレゴン州に行ってもなかなか出来ない経験をたくさんできました。隣のおじいさんとおばあさんの家にも挨拶へ行きました。その家はおじいさんが作った家らしく、全ての部屋に案内してもらいました。地下もあり、一人で作ったとは思えないほど、とても良い家でした。



オレゴン州での食事は、日本に比べて揚げ物や、お肉が多かったです。どれも日本と違う味付けや食べ方があり、すべて美味しかったです。日本人が営業しているラーメン屋にも行きました。日本とは違うラーメンの中にはニラのようなものが入っていて、ラーメンでも違いを見つけることができました。

研修全体を通して、初めは団員と仲良くできるか、ホームステイは大丈夫なのか、英語は話せるのかなど不安や心配しかない中でしたが、ジェスチャーを使ったり、単語でうまく繋げて話をしたり、自分の中で出来ることを考え、最善を尽くせたのが本当に良かったと思います。探求テーマについても、自分なりに聞くことができ、日本との違いについて学ぶことも出来ました。遊ぶことも学ぶことも楽しむことも全てにおいて、全力でできたと思います。なかなか出来ない経験をしたことは一生の思い出になると思います。オレゴン州に行けたのも、親やホストファミリー、団員、団長さん達、オレゴン州で関わってくれた方々のおかげで、成功することができたと思います。いろいろ学ぶことができ楽しむことも出来ました。今回の研修で学んだコミュニケーション力や経験を日本でも生かし、またみんなに会える日までにスキルアップして積極的に話したいです。



成長できた研修

岐阜県立大垣商業高等学校2年 伊藤 夢那

【10月16日 サンセット高校とオレゴンコースト】

オレゴンで過ごす最後の日、私たちは、サンセット高校とオレゴンコーストへ行きました。

サンセット高校では、日本語クラスで大垣や日本の文化、高校生活についてのプレゼンを行いました。アメリカでの最後のプレゼンテーションだったこともあり、プレゼンにも、英語にも慣れ、私たち10人らしいプレゼンを行うことができました。質問をすると反応してくれたり、プレゼンが終わると拍手をしてくれたりと日本について興味を持ってもらえて、嬉しかったです。プレゼン後は、グループに分かれてグループトークを行いました。私たちに手作りクッキーをくれたり、アメリカのお菓子を用意してくれたりと、温かく迎え入れてくれて緊張がほぐれました。また、トーク中には、事前に考えてくれた日本語で質問してくれました。そこから会話も広がり、言語を超えて仲を深めることができたと感じています。



サンセット高校を訪れた後は、オレゴンコーストへ行きました。私は、派遣団の衣織と恋寧と、海に、足だけですが入りました。10度近い気温で、オレゴンの人でも海に入らないと言われたほど、水はとても冷たかったです。海がない県に住んでいる私たちにとって、楽しい思い出となりました。海周辺には、たくさんのお店が並んでいました。どこも海を感じさせる品物が置いてあり、お土産探しに夢中になりました。アイス屋さんでは、たくさんの味から味見したいものを伝えました。日本では、お店側から味見を提供してもらうことが多いですが、アメリカは味見したいものをお客さん側から伝えることも初めて知りました。注文をし、アイスを食べました。店内は、天井から床まで盛大にハロウィン仕様に装飾されていて、そこからも日本との違いを感じました。



【アメリカの政治・経済】

日頃、ニュースでは物価やアメリカの政治が報道されていること、商業高校に通っていることから興味を持ち、派遣中はアメリカの政治・経済について知ることを意識して過ごしました。

まず、ホストファミリーに物価について話を聞いてみました。大統領がトランプ氏に変わってからお肉や、日用消耗品が高くなつたそうです。今、1ポンド(約450g)あたり12ドルの牛肉は、以前は9ドルほどだったそうで、高くなっていることがわかりました。ガソリンは変わらず、卵は鳥インフルエンザがなくなったため、安くなっているそうです。日本では、お米が高くなつたけれど、アメリカは、以前と比べてもあまり変化はないそうです。



次に政治についても話を聞いてみました。私がホストファミリーの家で過ごしたとき、政府閉鎖中で、政府職員は給料をあまりもらえていないため、ホストファミリーは政府に対して、いいイメージが

ないと話していました。

大統領が変わるとなぜ、高くなるものができたのか、なぜ、政府閉鎖しているのか疑問も増えましたが、政治についての話をすると空気が重くなるのを感じ、深くまで話を聞くことはできませんでした。調べてみると、アメリカ社会は民主党支持層と共和党支持層の間で、価値観や信条が分断されているそうで、政治については暗黙の了解で触れてはいけないものだと感じました。しかし同時に、アメリカの人は政治についても自分の考えや意見を持っていて、私も日本の政治に興味を持ち、選挙権を持ったら選挙へ行きたいと思いました。

【ホームステイと研修を通じて】

私のホストファミリーは、6月に私の家にホームステイに来てくれたエマと、エマの友達のアシュリンの2家庭でした。



初めの2泊は、アシュリン家で過ごしました。迎えてくれてからすぐに、スケートリンクへ行きました。アシュリンとはあまり話したことが無かったので、とても緊張していましたが、一緒にスケートをしてお互い馴れ親しむことができました。サタデーマーケットやスーパー・マーケットにも連れて行ってもらいました。ハイップを上に飛ばして口に入れるという、アメリカらしい、日本ではやらないような遊びを教えてもらい、家族でとても盛り上がりました。床に落ちてしまったハイップは4匹の犬が舐めていて可愛かったです。



アシュリン家とお別れし、エマ家で3泊過ごしました。久しぶりに再会することができて嬉しかったです。フィリピンの家族なので、フィリピン料理を食べたり、フィリピン語を教えてもらったりしました。アメリカだけでなく、フィリピンについても触れることができました。家族みんなで、山から見たユージーン市の夜景はとても綺麗で目に焼き付いています。ハロウィンの装飾がされている建物を巡ってくれたり、夜までショッピングに連れて行ってくれました。



ホームステイは派遣団のみんなと離れて1人になるので不安でしたが、両家とも温かく迎え入れてくれたことに感謝しています。英語が理解できるようにゆっくり、聞き取りやすく話してくれたりと、英語力に不甲斐なさを感じましたが、優しさにたくさん救われました。



ホームステイ中、特に感じたのは、アメリカの人は自分の気持ちをはっきりと伝えるということです。「どっちがいい?」と聞いてくれた時、「んー」と迷っていると、「YesかNoをはっきり言いなさい」と、どちらの家族にも言われました。また、会話の途中では、相槌や反応を入れたりしていて、自分の感情をさらけ出しているところが日本と違って面白いなど感じました。ホームステイ中、内気な私が英語で自分の意思を伝えたことは、大きく成長できた場面だと感じています。

この研修を通じて、たくさんの発見がありました。見た景色や感情は一生の宝物です。この経験をここで終わらせるのではなく、社会や人の為に活躍できるよう、生かしていきます。

オレゴンの思い出

岐阜県立大垣北高等学校2年 稲川 七瀬

【10月10日 マルトノマの滝訪問】

アメリカ滞在中、現地の高校生たちとともにコロンビア渓谷を訪れました。最初に訪れたクラウンポイントのVista Houseは、高台に建つ円形の建物で、そこからはコロンビア川の雄大な流れと、その向こうに広がるワシントン州の景色を見渡すことができました。内部には資料展示や売店があり、歴史を感じられる落ち着いた雰囲気が漂っていました。外に出ると風が非常に強く、思わず身震いするほどでしたが、自然の厳しさと美しさを同時に感じることができました。

続いて向かったマルトノマの滝では、落差189メートルの水が勢いよく流れ落ちる様子に圧倒されました。橋の上では水しぶきが届くほど滝を近くに感じることができ、自然の力強さが全身に伝わってきました。この滝には、部族を救うために身を投げた娘の魂が滝となって現れたという先住民の伝承があり、その物語を思い浮かべながら眺めると、風景がいっそう深みを増して見えてきました。周囲の

木々はちょうど黄色に色づき始め、大きな楓の葉が地面を覆い、日本とは異なる自然のスケールを実感しました。



観光のあとに立ち寄ったレストランでは、運ばれてきた料理の量の多さに驚かされました。英語での会話には少し不安がありましたが、身振りや表現を工夫しながら話しているうちに徐々に緊張もほぐれ、交流を楽しむことができました。雄大な自然と人とのつながりの両方を味わうことができたこの一日は、心に深く残る思い出となりました。

【オレゴンの福祉制度】

今年の3月、セブ島のボランティア活動に参加した時、国からの支援が少なく貧しいスラムの生活を実際に見て、他国の福祉制度に興味を持ちました。そこで、今回の研修では特に低所得者に対する福祉に着目し、ホストファミリーやビーバートン市長に聞いたことを元に国ごとの福祉のあり方を考察します。

世界の国や地域では、貧困や格差をなくすためにさまざまな福祉制度がつくられています。その中でも、アメリカのオレゴン州、日本、そしてフィリピンのセブ島を比較すると、制度の内容だけでなく、支援の考え方や社会の仕組みに大きな違いが見られました。

まず、オレゴン州では、低所得者の生活を守るための制度が整っています。例えば「オレゴン・ヘルス・プラン」という医療保険制度です。収入の少ない人でも無料または低料金で医療を受けることができます。また、「SNAP」(Supplement Nutrition Assistance Program)という食料支援制度や住宅補助、公営住宅の提供なども行われています。さらに、職業訓練や教育支援まであり、単に「お金を与える」だけではなく、人々が自立できるよう支援する制度が特徴です。このことからオレゴン州が個人を尊重し人権を重視する社会であること、また地域住民のつながりを大切にす

る文化が考えられます。

日本では、生活保護制度や国民健康保険、児童手当など、多くの制度が整っています。例えば生活保護を受けると、生活費や家賃、医療費などが支給され、最低限の生活を守ることができます。また、高齢者や障がい者、子育ての支援まであります。しかし、日本では「生活保護を受けるのは恥ずかしい」という意識があり、実際には制度を利用できずに困っている人も少なくはありません。制度が整っていても、社会の理解や人々の意識で十分にその制度を活用できないという課題があります。また、高齢化が進む中で、限られた財源でどのように持続可能な福祉を維持していくかも大きな問題です。

一方、フィリピンのセブ島では、まだ十分な公的福祉制度が整っていません。政府の「4Ps」(Pantawid Pamilyang Pilipino Program)という現金給付制度では、貧困家庭に教育や健康の条件を満たすことで支援が与えられますが、対象となる世帯は限られています。実際にスラムに住む方を訪ねたときも、両親とも仕事を失っても申請の許可がおりず支援を受けられていないと聞きました。医療や教育も自己負担が多く、子どもたちが学校に通えないこともあります。しかしその一方で、セブ島では家族や地域のつながりが非常に強く、ボランティアや地域住民が協力して助け合う文化がありました。

3つの国を比較すると、日本やオレゴン州のように制度を整え、セブ島のように人々のつながりを大切にする社会をつくることが大切だと考えました。

【ホームステイを通して】



ホストファミリーはとても明るくて親切で楽しい人達でした。到着した日から笑顔で迎えてくれ、たくさん話しかけてくれたおかげで、緊張がすぐにはぐれました。一緒にハロウィーンの飾り付けをしたり、家の周りや川沿いを散歩してオレゴンの動物や自然を紹介してもらったり、ホストシスターのヴァイオリンを聞いたりしました。英語で話すことに初めは不安もありましたが、間違えを気にせずたくさん質問をしたり会話をしたりするうちに、少しずつ自信がつきました。学校や仕事、趣味、流行、オレゴンのことなど毎日いろいろな話をしたけれど、とても楽しい時間を過ごしました。こんなに温かく迎えてくれたホストファミリーにとても感謝しています。

オレゴン州での研修を通して、言葉や文化の違いを実感し、多くのことを学ぶことが出来ました。不安に思っていた英語も勇気を出して話しかけてみれば意外と話せて、少しずつ自信が



つきました。同時に、優しく接してくれるホストファミリーや友達や地域の人のおかげで、英語を話すことが楽しくなりました。間違えても教えてくれたり、ゆっくり話してくれる優しさがとても嬉しかったです。日本との違いを体験することで、自分の考え方や価値観が広がった充実した研修でした。



世界は意外と近かった～最高の10日間～

岐阜県立大垣東高等学校2年 大久保 衣織

【10月14日 サウスユージン高校訪問】

私たちは日本語クラスで日本紹介・学校生活のプレゼンテーションを3回行った。プレゼンテーションでは日本に関するクイズも交え、大変盛り上がった。「アメリカはこうなんだよ」「こういう時日本はどうなの?」と反応してもらえて、お互いの学校生活の違いを知ることもできた。アメリカの子達のプレゼンテーションは、スラングや現在アメリカで流行っていることを教えてくれ、方法もユニークで自由な感じで、とても面白かった。



その後のレクリエーションでは、グループに分かれて交流した。日本のお菓子の紹介や、プレゼンテーションで伝えきれなかった日本の文化等について交流した。教えてもらったスラングをさっそく使ってみると、とても喜ばれ、楽しい時間になった。日本語で話しかけてくれる生徒もたくさんいて感激した。



現地の高校生の英語は、スピードが速く聞き取りが大変で、会話について行くだけで必死になり、予想以上に自分の思いを話すのが難しかった。しかし、言いたいことが伝わった時は大変嬉しかった。もっと英語力を向上させ、もっとスムーズな会話ができるようになりたいと切に思った。

日本語クラスの他に、ホストシスターの友達のValerieと一緒にヨガのクラスを受講した。ヨガのクラスにはアメリカ人だけでなくイタリアからの留学生もいたが、皆、特別扱いせず接してくれるのが心地よく感じた。ヨガをしながら、たくさん会話をしたり、ちょっとふざけ合ったりした何気ない時間が、私にとってかけがえのない思い出になった。

【アメリカと日本の食文化の違い】

私の探求テーマは「アメリカと日本の食文化の違い」で、具体的には「食事前後の挨拶」について探求した。日本では、食事前後に「いただきます」「ごちそうさまでした」を口に出して言うが、アメリカでは、何か言ったり、お祈りなどの動作をしたりするのかが気になったためだ。実際ホームステイ先で見ていると、準備が整い、皆が揃うと、何も言わずに食べ始めた。そこで、ホストファミリーに日本では食事前後に必ず「いただきます」「ごちそうさまでした」を言うことを伝えると、真似をして言ってくれるようになった。発音が難しそうだったが、一生懸命に言ってくれて嬉しかった。意味を説明すると納得してもらえた、ホストファミリーの家ではそのような習慣がないことを教えてくれた。小さなところにも文化の違いを感じることができた。



また、日本のように料理毎に別々の皿を使用せず、基本的に1人1枚のプレートに料理を盛り合わせる形式だった。アメリカでは皿を持ち上げて食べるとマナー違反になるため、このような形式なのではないかと考えた。日本では皿を持って食べないと、逆にマナー違反になるため驚いた。食事の時間を通じてホストファミリーや友達とたくさん話して仲良くなり、様々な文化の違いを体験して

交流することができた。

【ホームステイと研修からの気づき・アメリカ人の優しさ】



6月にホームステイの受入をできていなかったこともあり、ホストファミリーに初めて会うとき、私はとても緊張していた。事前に翻訳機も駆使して何を話すのかを色々考えていたけれど、対面した瞬間、頭が真っ白になり、すべて忘れてしまった。しかし、なかなか英語が出てこない私を、話し終わるまで温かく待ってくれ、ゆっくり話してくれたおかげで、すぐに緊張がほぐれた。

2日目、ホストファミリーと農園に行って「パンプキンパッチ」やアクティビティを楽しんだ。特に、ホストシスターのKeiraと一緒に「メカニカル・ブル」に挑戦した時には、激しく動くロデオから落ちないように耐えるのが、スリル満点で大変盛り上がった。皆が、「手を離して乗ってみて」、「とても上手だったよ」と声を掛けてくれ、皆で盛り上げ合っている雰囲気が素敵だと思った。



3日目に農園で収穫したカボチャを使用して、KeiraとValerieと一緒にジャック・オ・ランタンを作った。Keiraは私の英語力に合わせて会話をしてくれていたため、Valerieと初めて会うときには、



会話が通じるのか心配だったが、積極的に話してくれて、日本についてもたくさん質問してくれた。2人は、私が理解できていないと気付くと、簡単な単語で言い直す等、理解できるように試行錯誤して、疎外感を感じさせないようしてくれた。また、2人は「素敵だ」と思ったことはすぐに伝えあって、「その服素敵だね」「あなたのジャック・オ・ランタンいいね」等と、褒め合っていて、私も褒めてもらえて嬉しかった。日本では、「素敵だ」と思っても素直に伝えられずに後悔することも多いので見習いたい。2人とは、クッキーを作ったり、ショッピングモールに出掛けハロウィングッズを見たりもした。クッキー作りでは、私に「レシピを読み上げて」、「この食材分かる?」等と質問し、英語上達の機会を作ってくれたことにも感謝している。



最終日、Keiraに「たくさん英語を教えてくれてありがとう。少し英語力が上がった気がする」と伝えると、「他にも知りたい単語ない? 今、見える範囲で分からない単語全部教えるよ!」と言ってくれて、気遣いと優しさに胸がいっぱいになった。

本研修を通じて、私が痛感したことは、自分からコミュニケーションを取ろうとする姿勢や、英語や文化を知りたいという気持ちを積極的に伝えることが最も大切だということだ。きれいな文章、正しい文法で話すことは到底できなかった。しかし、現地の人たちは私が、何を話したいのか一生懸命に感じ取って、根気よく話してくれた。だからこそ、これからもっと英語学習を頑張りたいと思えたし、もっと気楽に英語で話して良いのだと思えた。この経験を通じて知った、リアルな英語や文化の違いを今後たくさんの人に伝えたい。そして、言語や文化の違いを超えて人とつながり、そのつながりを広げていける人になっていきたい。



学んだこと、今後に生かしたいこと

大垣日本大学高等学校2年 小川 恋寧

【10月14日 チャーチル高校】

私達は10月14日にチャーチル高校の日本語クラスを訪問しました。そこでは、派遣団のメンバーとプレゼンテーションを行い、交流を深め、学校見学をしました。プレゼンテーションは日本で練習をたくさんしましたが、いざ現地の生徒を目の前にしてみると原稿通りに話しても伝わらず、首を傾げるといった場面がありました。仲間で協力し合うことで、うまく伝えきることが出来ました。



昼食は日本語クラスの生徒と食べました。そこではたくさんの生徒が私たちに話しかけてくれ、インスタグラムの交換、写真撮影、お菓子交換などをして、とても楽しい時間を過ごしました。

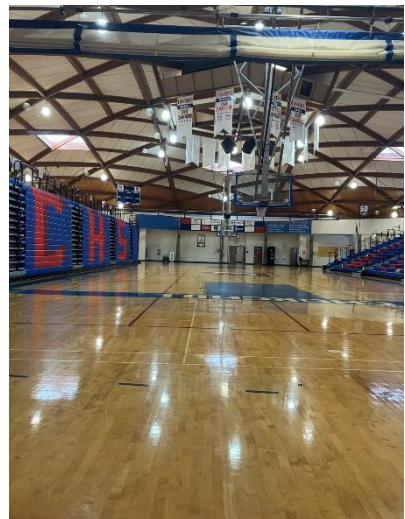
今でもインスタグラムを交換した生徒とはメッセージのやり取りをし、プレゼンテーションだけでは伝えることができなかった、大垣のことや高校について

教え合い意見交換をしています。また、次の夏に大垣に来てくれる友達ができたので会う約束をしています。夏が待ち遠しいです。

学校見学では、日本の高校とは違う部分を多く感じました。校舎が1階建てで、自分が選択した科目の教室に生徒が移動するといった仕組みでした。また、いくつかの科目がある中で、私は生物学に惹かれました。教室の中には、透明標本、剥製がたくさん

ありました。日本の理科室では見ない光景でとても新鮮でした。

また、体育館がとても広く、試合が観戦できるための椅子がありました。体育館には、ジムが2つもあり、派遣団のメンバーと50ポンド(約23kg)のダンベルを片手で持ってみたり、懸垂をしたりしたけれど、現地の筋肉自慢の方々には勝てませんでした。



学校案内をしてくれたホストシスターの方々が剣道やフェンシングを教えてくれたのもとても楽しかったです。

【価値観の違い、考え方の違い】

私がこの探求テーマにした理由は、夏、オレゴンからのホームステイ受け入れをした際に出会った生徒から、「なんでそんなに〇〇なの?」といった質問をたくさんされたときに「確かに」と考えさせられたことが多かったです。

実際に学校で衝撃を受けたことがあります。授業中にたくさん「自分の考え」を口にしていたことです。一見したら普通のことのようですが、私の学校では授業中に意見や質問をためらい、授業後

に質問をしに行くことが多いです。アメリカの高校は、授業中に積極的に挙手をして先生に質問をしていました。私は、ホストシスターに「間違っていたら恥ずかしいとか思わないの?」と聞きました。シスターは、「なんで恥ずかしいとか思うの?分からぬうが恥ずかしいよ」とはっきり述べてとてもかっこいいと思いました。そこで改めて私は、「周りと同じことがなんなく安心」と考える日本人の感覚を実感しました。

私は、アメリカの生徒から学んだ『前向きな考え方』を大切にし、授業中だけに関わらず周りの目線を気にせずに多くのことにチャレンジしていきたいです。

【ホームステイ・仲間の大切さ】

ホームステイで特に楽しかったことが2つあります。

1つ目はアメリカの朝食の定番であるシリアルの食べ比べです。オレゴンに行く前にホストファミリーと何したい?と話し合っている際、私は、アメリカのシリアルはとてもおいしいと聞いたので食べてみたいと伝えていたら、8種類のシリアルを用意してくれました。一口ずつ食べて、美味しいものもあればあまり好みでない味もありました。またアメリカらしいカラフルな可愛さで、お土産としてとても大きいサイズを買いました。見て楽しく、食べても美味しい!そんな食べ物やお菓子が多くてハッピーな気分になりました。



2つ目はジャック・オ・ランタンを作ったことです。かぼちゃはスーパーマーケットで買ったのではなく、かぼちゃ農家に連れて行ってもらい、自分で収穫をしました。1家庭に1個かぼちゃを掘る機械や小さいのこぎりがありました。初めてジャック・オ・ランタンを作り、私が作ったものはかわいくはできなかったですが、ホストファミリーにたくさんほめもらえたので、楽しかったです。初めてのホームステイで緊張していましたが、日本ではできないことやアメリカでの生活を肌で感じることができ、とても楽しかったです。また会いたいです。



この研修を通して、改めてコミュニケーションの大切さを知りました。私は正直あまり英語が得意ではありません。ですが語学力だけが、国際交流にとって大切なわけ



ではなく、コミュニケーションを取ろうとする勇気や伝えようとする気持ち、そういった行動がたどたどしい会話ながらもコミュニケーションを作り、時には言葉以上のコミュニケーションを楽しむことが出来ると知りました。



私にとってこの経験はかけがえのない宝物になりました。

My Treasured Memory

済美高等学校2年 吉田 珠里

【10月13日 サウスユージーン高校訪問1日目】

サウスユージーン高校1日目について紹介します。私の印象に残っている授業は、社会学です。その授業では、先生が、環境問題と働く人についてディベートを行っていました。そこでは、挙手をして、積極的に意見を述べていたり、お友達と相談して意見を考えたり、そのような時間が先生から与えられていなくても、生徒だけで話が進んでいく授業を体験しました。

お昼には、カフェテリアに行って、学食を食べました。バイキング方式で、肉、野菜、果物と充実していて、しかも食べ物が温かかったです。お金はどこで払えばよいかと聞くと、無料で配っているからいらないと答えてくれました。また、食べ物を売っている屋台へ連れていってもらいました。そこでは、いろいろな国の食べ物の屋台を見つけることができました。まず学校の外でお昼やお菓子などを食べることが許可されていることに驚きました。ここは、日本との大きな違いでした。



また午後から、日本語教室に参加しました。日本の学校生活や文化について紹介をして、いろいろな人と友達になることができました。

学校訪問を通して、アメリカの生徒たちは、たくさんの選択肢があり、自分を表現する力が高く、自ら考え行動すること、何かを伝えることが出来ると分かりました。自由度が高い分、それをどう活用するか考えなければいけない難しさを感じました。



【アメリカの授業選択について】

私は、6月にホームステイを受け入れた子から聞いた自分で選択できる授業がたくさんあるという自由性が気になり、いろいろな人に話を聞きました。

私たちも、文理選択やその先で何の科目を選択するか決定しなければいけない場面はあります。たった一つを決めるだけでも迷ってしまったという経験があります。

だから、私は、自分が受ける科目を選ぶとき、どのように決めるのか、その選択に対して選ぶときに不安に思うことはあるのか、ということに着目して、インタビューしました。

そこでは、友達と一緒に授業を受けたい、夢につながるなど、私たちに近しい答えを得ることができました。その中で、不安に思うことがあるのかという質問に対して、「選んでみて後でまた来年変えられるから、そこまで心配することはない。何か困ったことがあったら、その時また考えればいい」という考え方を教えてもらいました。自分は、やる前にリスクや不安を感じて踏み留まってしまうところ

ろがありますが、まず、挑戦してみる。自分でやってみたいと思う方向に進んでみる。その中で何か困ったことがあつたら、周りの人に相談したり、やり方を変えてみたりする。このようにして、教えてもらった考え方を自分なりに生かして生活したいです。

【ホームステイについて】

日本で受け入れをした子とは別の家庭にホームステイすることに決まり、会うまで不安でした。

しかし、初めての夕食の時“Help yourself”と温かく歓迎してくれて安心することができました。そこで、日本の学校のこと、大垣のこと、アメリカに到着後どこを観光してきたか等いろいろお話ししました。ホストファザーは、大垣を訪れたことがあると聞き、驚きました。お城めぐりをしている時に、大垣城に足を運んだそうです。私は大垣の地名の由来について聞かれた時、戸惑いました。もっと自分の地元大垣について知りたいと思います。



またホストファミリーの家は、とても大きく、自然を感じられる場所にあって日本との大きな違いを感じました。

土曜日には、サタデーマーケットへ行って、見たことのない野菜や種類が豊富なキノコなど、たくさんの初めてに出会い、太鼓を演奏する人達や、声をかけてくれる店員さんなど活気あふれる雰囲気を体験しました。

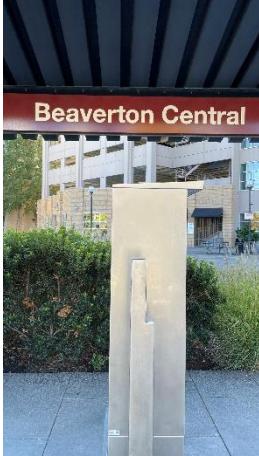
お昼から夕方にかけて、ホストシスターの友達とクッキーづくりを楽しみました。友達が来て、話を始めると、会話が早くて、ついていくのがなかなか難しかったです。聞き直してしまった事もあったけどジエスチャーだったり、困っていることに気づいてゆっくり喋ってくれたりして、伝えたい、聞きたいという思いがあれば、伝えられることが分かりました。

私は、ホストシスターが料理をする時の手際の良さに驚きました。ホストシスターに、アメリカには、家庭科の中でも調理実習をメインとする1年間必修の授業があり、学校で料理の作り方を習うことができると教えてもらいました。その夜には、遊びに来ていた友達と夜ご飯を食べたあと、オーケストラの練習を見に行きました。そこでは、指揮者の人が、観客の方を見て「楽しんでいるかい」など曲が終わると、声をかけ、観客も一緒に盛り上がるといった日本ではなかなか見られない一体感のある賑やかな会場を楽しむことができました。

言葉が聞き取れなかったり、意味がうまく伝わらなかったり、力足らずなどころもありましたが、理解しようしてくれて、とっても嬉しかったです。ホストファミリーと過ごしていると、楽しくてすぐに別れが来てしまい悲しかったです。私を家族の一員のように接してくれたホストファミリーが大好きです。

今回の研修に参加して得た挑戦する時の考え方と、コミュニケーションを自分から積極的に行う姿勢を今後の生活に活かしていきたいと思います。また、この企画をしてくださった大垣市、引率して下さった先生方、背中を押し応援してくれた家族、友達、ホストファミリーに感謝いたします。



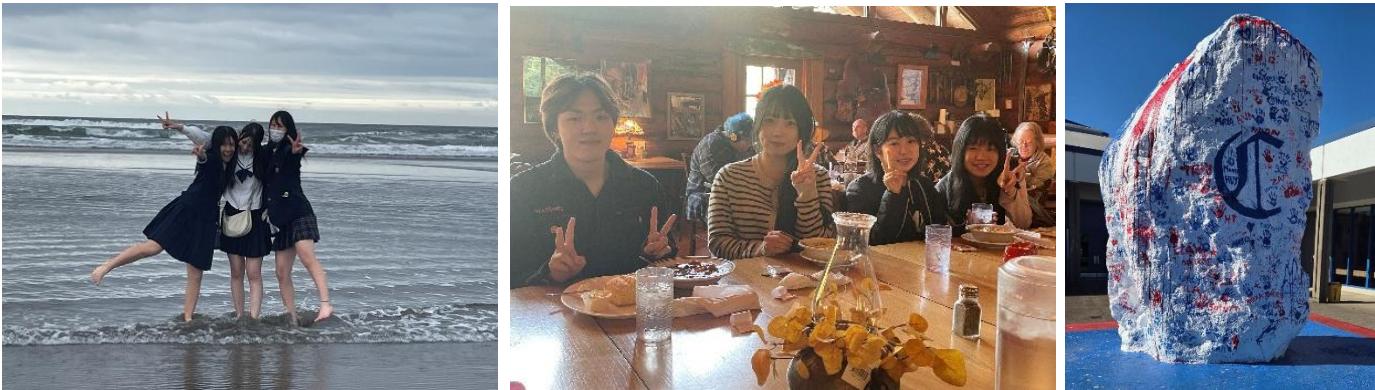




Welcome to the United States













Serisu and Sofia's family



Nagisa and Lily's family



Wakana and Sofia's family



Yuzuki and Jillian's family



Rui and William's family



Yumena and Emma's family



Yumena and Ashlyn's family



Nanase and Sabine's family



Iori and Keira's family



Rene and Elodie's family



Juri and Amelie's family

第7回 大垣市高校生米国オレゴン州ビーバートン市、ユージーン市研修派遣報告書

編集 公益財団法人 大垣国際交流協会

大垣市室本町5丁目51番地 スイトピアセンター学習館2階

TEL:0584-82-2311 URL:<https://www.i-oiea.jp>

発行 令和7年(2025年)12月